

## 書 評

丸山浩明：『アマゾン五〇〇年—植民と開発をめぐる相剋』岩波新書，2023年8月刊，286p.，1,060円（税別）

「アマゾン」という地域の一般的なイメージとはどのようなものであろうか。まずは世界最大の流域面積を誇る雄大なアマゾン川と広大な密林地帯、そしてそれを基盤とした豊かな生物多様性を有する秘境といったところであろう。その一方で、もう一つ「アマゾン」から連想されるのは、「地球の肺」と呼ばれる熱帯雨林地帯における、1970年代以降のここ「50」年かそこらでの急速な開発にともなう森林伐採に象徴される地球環境問題であろう。そうした一般的イメージに対して、本書が読者に伝えたいことを端的に表現するならば、アマゾンは決して人跡未踏の秘境などではなく、ヨーロッパやアメリカ、日本がさまざまな思惑を持って次々と進出し、入植と開発の舞台となってきた。その時間スケールは「500」年である。

本書は、そうしたアマゾンの500年にわたる植民と開発をめぐる相剋を、ポルトガル、アメリカ、イギリス、日本の順に主な焦点を当てながら時系列的に詳述していく。以下に本書の各章のあらすじを簡潔に紹介する。

序章「アマゾンの「原初の風景」」では、本書を読み進める上での前提としての、16世紀にヨーロッパ人に発見される前のアマゾンの自然環境と先住民の生活世界が描かれる。前半部分では、まさに冒頭で述べた現在の一般的イメージにも合致するような、アマゾンの豊かで多様な自然環境を解説している。そして後半部分では、そのような自然環境に見合った多様な先住民の狩猟採集や農耕を中心とする生活文化を紹介している。

第一章「ヨーロッパ人に「発見」されたアマゾン」の主役は16世紀から19世紀前半のポルトガルである。しかし、トルデシリャス条約を根拠として、1542年にアマゾンへ最初に足を踏み入れたのはスペイン人であった。ポルトガルがアマゾン征服に乗り出すのは17世紀に入ってからであるが、当時のポルトガル本土はスペインに併合されており、同君連合体制下にあった。ポルトガルはこの状況をむしろ巧みに利用し、スペインの支配領域であったアマゾンでの植民活動を活発化させた。そして、1640年にその体制が解消され独立する頃には、アマゾンはポルトガルが実効支配する地域になっていた。しかし、その実効支配にとっての最重要課題であった労働力としての先住民の監督と統治をめぐることは、国内のカトリック修道会（主にイエズス会）と植民者との対立が顕在化した。その後1822年に、ブラジルはポルトガルからの独立を宣言するが、植民地時代を通じてポルトガル王室の直轄領であったアマゾンでは、1835～1840年の5年間にわたって、ブラジル独立派とポルトガル王朝派（独立反対派）による内乱が続くことになった。

第二章「アメリカの進出と南欧移民の導入」では、ブラジル独立後の19世紀帝政時代におけるアメリカのアマゾン進出が詳述される。1840年代に領土を西の太平洋岸にまで拡大し、さらに南（ラテンアメリカ）への膨張を志向したアメリカは、国内の黒人奴隷をアマゾンに移住させ、新たな植民地を建設することを企図して、アマゾン川の開放・国際船の自由航行をブラジル政府に求めた。その結果、1866年には、すべての国に対しアマゾン川の航行が認められることになった。一方で、黒人植民地の建設自体は、ブラジル政府に拒否さ

れたことと、それを推進していた南部連合が南北戦争に敗れたことにより、結局実現しなかった。しかしながら、奴隷制廃止後のアメリカにおいて、存続派であった旧南部連合支持者（旧奴隷農園主など）の中には、ブラジルへ移住する者もいてアマゾンにも植民地が建設されたが、その生活は困難なものであった。

ブラジルでも1888年に奴隷制が廃止され、その代替労働力としてヨーロッパからの移民の導入が進められた。アマゾンにも多くのヨーロッパ系移民が流入したが、農業に従事したのは主にスペイン人であり、それ以外のポルトガル人やイタリア人などは、都市に居住し商工業の発展に貢献した。

第三章「ゴムブームの到来とイギリスの策動」では、19世紀後半から20世紀前半にかけての、天然ゴムによってもたらされた好景気（第一次ゴムブーム）に焦点が当てられる。ゴムブームによって、アマゾンには国内外から多数の移民が流入し、マナウスやベレンといった大都市を発展させた。そのゴム産業を支えたのは、北東部の奥地からアマゾンに送り込まれた早魃難民たちであったが、奴隷のような過酷な労働を強いられた。また、上流域の舟運が不可能な区間では、ゴムなどの生産物を輸送するための鉄道の建設が企図され、日本人を含む世界中から多くの労働者が集められた。その鉄道建設は困難を極め、伝染病の流行もあって多くの犠牲者を出したが、1912年ようやく開業に至った。しかし、アマゾンのゴムブームは1910～20年代に急速に衰退した。それは、イギリスがアマゾンからパラゴムノキの種子を持ち出し、それをアジア植民地に移植してプランテーション栽培を発展させたことで、生産地としての国際的優位性を失ったからであった。そのため、多くの犠牲者を出しながら建設された鉄道も、ゴム輸送に活躍したのはわずか数年のみで経営破綻してしまった。

第四章「過熱する日米の覇権争い」の中心テーマは、20世紀前半における日本人のアマゾン進出である。アマゾンに最初に定住した日本人は、20世紀初頭にペルーからアンデス山脈を越えてやって来たゴム採取労働者たちであった。一方、1920年代にはブラジルでも、サンパウロ州における日本人移民の急増から黄禍論・排日論が高揚したが、その緩和策として日本人のアマゾン送出が計画された。その結果、1920年代後半から1930年代にかけて、アマゾンの各地に日本人植民地が建設され、多くの人たちが入植した。しかし、満州事変を起こした日本の膨張主義に対する警戒から、アマゾンの日本人植民地でも排日論が再燃した。さらには、資金不足による経営難やマラリアの流行などもあり、1941年時点でアマゾンに定着した人は移民全体の約3分の1にすぎなかった。

第五章「第二次世界大戦とアマゾン—悲劇のゴム兵と日本人移民」は、第二次世界大戦の戦時下におけるアマゾンでの第二次ゴムブーム、および敵性外国人になった戦中・戦後の日本人移民に焦点を当てる。1942年のブラジルとアメリカによる「ワシントン協定」により、ブラジルはアメリカの融資の下、アマゾン産ゴムの増産に向けて動き出した。そのための労働力として、第一次ゴムブーム時と同様にブラジル北東部の奥地から「ゴム兵」と呼ばれた大量の早魃難民が送り込まれた。しかし、故郷とは全く異なる気候と不慣れで過酷なゴム採取作業が災いして、約55,000人のゴム兵のうち30,000人近くが命を落としたとされている。その第二次ゴムブームも終戦とともに終焉を迎え、アマゾンにほとんど何も利益をもたらすことはなかった。

1942年の「リオ会議」においてブラジルは連合国側についたため、日本人は敵性外国人とみなされるようになった。それによってアマゾンでは、ブラジルの州政府による日本人植民地の接収や現

地法人の事業清算が行われた。戦後の1953年からはアマゾンへの日本人移住が再開され、各地に日本人入植地が建設されたが、その多くは僻遠の劣悪な土地であった。そのため、戦後移住者の半数以上が最初の入植地から転住している。一方で定着率の高かったいくつかの入植地には、現在でも日系人が集住する地区が形成されている。

終章「アマゾンの「現代的風景」」では、1970年代以降のブラジル政府によるアマゾンの国家的開発計画を概説し、それらにともなう森林破壊の推移を示している。また環境保全とならぶアマゾンの現代的課題である先住民の人権保護に関連して、ブラジルの先住民法制の経緯と現状および人口・主な民族について紹介している。そして最後に、今やBRICSの一員として経済発展を遂げたブラジルが、地球環境問題や先住民問題で世界をリードする存在になることを期待して本書は締めくくられる。

以上、紙幅の都合上すべてを紹介することはできないが、本書の特色としてはまず、広大な土地と豊富な資源を誇るアマゾン川流域における、植民と開発をめぐる欧米や日本、ブラジルという国家間のさまざまな思惑や政治的駆け引きが話題の中心になっている点が挙げられる。その内容を、大航海時代以降の世界史全体における欧米諸国の植民地政策の流れの中に位置づけながら読むと、アマゾンの500年の歴史がまさに、そうした世界史全体の縮図のように感じられて興味深い。とくに日本と欧米諸国との関係の歴史と類似している点に触れると、スペイン人がアマゾンに初めて踏破した1542年といえ、日本にスペイン人やポルトガル人が最初にやって来た時期と重なる。また、16～17世紀のポルトガルによる植民地政策に、イエズス会などのカトリック修道会が大きく関わっていたこともそうであるし、アメリカがブラジルにアマゾン川の開放を迫った1850年代は、まさに

同国が日本に開国を迫ってやって来た時期と一致している。このように互いに地球の反対側にある日本とアマゾンとで、同じようなことが同じような時期に起こっていたという事実は、決して偶然ではないであろう。それと関連して本書の一つだけ注文を付けるとしたら、アマゾンの歴史を年表形式でまとめたものが、世界史および日本史上の主なできごとと併記しながら巻末に載せられていたら、読者はより本書の内容に入り込めたであろう。

一方で本書のもう一つの特色は、そのような国際政治の世界史における舞台裏というか当事者としての、さまざまな入植者たちの苦勞と困難の顛末を詳述している点である。すなわち本書は、「アマゾンがいかにして植民・開発されてきたか」というよりも、「アマゾンの植民・開発がいかに困難で簡単ではなかったか」を描いているといえる。その中でとくに本書では、戦前・戦後の日本人移民について多くのページが割かれている。アマゾンの日本人移民については、丸山編著(2010)でもブラジル全体の日本人移民の通史の中で取り上げられているが、同書を横糸とするならば、アマゾンという特定地域におけるさまざまな国による500年の相剋の中に日本を位置づけて捉えることができる本書は、縦糸のようなものであり、両方合わせて読むことでアマゾンの日本人移民についてより深く理解することができる。

いずれにしろ本書は、日本におけるブラジル地誌研究の第一人者によって、独自の調査・考察に基づき書かれたものであり、ブラジル・アマゾンの地誌に関心がある人はもちろんのこと、広く地球環境問題や人権・民族問題および世界史に関心を持つ人にとっても、大変示唆に富む書籍であるといえる。

(山下重紀郎)

文 献

丸山浩明編著（2010）：『ブラジル日本移民一百年の軌跡一』明石書店.